は、先に紹介した安藤和風と人見誠治の二人だけである。どちらかと言えば、安藤が編集の分野での 本県の新聞人で、東京の千鳥ヶ淵にある<自由の群像>碑にその名が刻まれる栄誉に輝いているの



見み

誠せい

治じ

全県少年野球

スポーツを通じて地域社会に貢献した新聞人

活躍が大きかったのに比し、人見は業務畑での活躍が目立ったようである。

二日である。子どものころは大変なガキ大将だったようで、エピソードがい 大正四年(一九一五)に秋田中学を卒業した人見は、税務署の書記や県庁職員を経験した後、 その人見誠治が秋田市南通 (旧中亀ノ町末丁)で生まれたのは、明治三十一年 ろい ろ残っている。 (一八九八) 一月十

十三年には秋田市立川尻小学校の代用教員になっている。

人見の人生のほとんどすべてと言っても過言ではない秋田魁新報社に入社したのは、 昭和二年

九二七)七月のことであった。

自社の主催行事として運営すべく人見を勧誘したのであった。 一回全県少年野球大会が秋田市で開催された。 人見は、当時、<旭クラブ>という草野球チームに所属していたが、彼の主導で大正十年八月、第 野球ブームは年ごとに拡大し、 魁新報社では、これを

周知のとおりである。 この大会は昭和二年の第七回大会から魁社の主催となり、今日ますます盛んになりつつあることは

事業家としての才覚

に専務の職にあった安藤和風は、 魁に入社した人見は最初、 翌年、 編集局計画 社長に昇格している。 部に配 属され、 運動部の記者も兼ねる。 人見の入社時

満 州 事変が勃発 したの は昭和六年九月十八日だが、 人見は、 満州に出動 した秋田歩兵十七連隊に従

軍して渡満 か 0 地 からニュースを送った。

部長 長と順 人見は昭 十五 調に社内での地歩を築いていくが、 記和十二 年六月編集 年一月の運動部主任を皮切りに、 発行兼印 刷 人、 十七年五 魁社内における人見の真骨頂は、 方計 画 同年五月計画部主任、 部 長兼社会部長、 同十二月業務局 十四年三月 業務局次長昇格以 計 次長 画 部 兼 長 後 兼 地方 画 業 部

務畑における活躍にあったと言われている。

当時、 人見が業務局次長となって七ヵ月後の十八年七月には、第二次新聞統制で県内紙 それまでの大きな活字から偏平活字の十五段制に記事を詰め込むようになる 太平洋 戦争二年目を迎えて、 全国 の新聞社はどこも紙不足、インキ不足に悩まされ は 魁 紙だけとな

実をもうけては 人見は、 車輛制限で大混雑する列車に立ちっ放しのまま東京の王子製紙へと向か 配給紙量を優遇してもらうと、 帰途は、 活字会社やインキ会社に立ち寄って、 特別

1,

さまざまな口

配送を懇願してまわるという日々が続いたのであった。

GHQの公職追放に該当して退任を余儀なくされたためである。 終戦とともに魁の社長は井上広居から古村精一郎、武塙祐吉と目まぐるしく変わる。 古村や武塙が

三年間の長きにわたり、 昭 和二十二年十一月、 武塙 近代化を進める魁社の最高責任者として活躍していくことになる。 の後を受けて社長に就任した人見は、 川 十四年に会長職に退くまで二十

かし、 社長になったとはいっても、 当初は苦労が絶えなかった。二十三年後、全社員に対する社

わ 戦のとき、金を借りることができなかったことです。県内の銀行には金はなく、 渡してよいのか苦労しました。しかし、 で大過なく過ごしてきました。その間、 れの力ではどうすることも出来ず、 私が本社社長になりましたのは終戦直後の二十二年の年で、以来二十三年の間みなさんのご協力 あらゆる犠牲を払って困難を切り抜けてきました。(『秋田魁新報社百二十年史』) 非常に困りました。 生活の資である月給を延ばしたり、 数々の思い出がありましたが、一番困ったのは混乱 今だから言えますが、 カットするわけには 県外 月給をなん の銀行 した終 は われ

方で最初の写真電信送受信装置を整備する。 りがな付き活字から新活字を採用して紙面記事を十五字詰め十五段制とし、翌二十六年には、 和二十五年、 前年創設した「夕刊秋田」を合併して朝・夕刊体制を復活した人見は、 さらに、 地

人見の近代化は、 その後も、昭和三十年の高速輪転機増設、三十三年の全面多色刷り超 新聞の増ページ対策として休みなく継続された。 心高速輪. 転機第二 一号機増設など、

七年には二科美術展を大々的に敢行している。 最 初 が秋 方では、二十三年から毎年つづけて絵画展を開催して文化事業にも精力を惜しまなかった。 H 蘭 一個展、 翌年が寺崎広業名作展、 さらに平福穂庵名作展、 平福百穂名作展とつづけ、二十

人見は、

魁の常務時代に県野球協会会長を務め、

地方新聞総連盟理事にもなっていたが、

社

長就任

その他、 秋田 !県初の観光三十景を選定したり、子どもから大人まで楽しませる魁動物園なども開催

したりした。

しかし、人見の事業的才覚をもっとも如実に示したのは、昭和二十八年のラジオ東北(現秋田放送)

開局前後だと言わている。

を得て十月一日から本放送にこぎつけ、 した。倉田儀一 この年の春、 編集局次長の出向による主幹を内定すると、 郵政大臣が全国に民間ラジオ放送の周波数を発表すると、人見はいち早く新設を決意 みずからが社長の席に着いて新規事業をリードしていったの 迅速果敢に県、自治体、 経済界等の同意

人見スポーツ賞

である。

るが、 盤固めと近代化をなし遂げ、 秋 田 それ以外の分野でも重要な仕事を数多く手掛けているので、箇条書き的に紹介してみたい .魁新報の歴代社長のなかでももっとも任期が長く、戦中、 中堅地方紙としての名声を高めた人見の功績はまことに大なるものがあ 戦後の厳しく困難な時代に魁紙 の基

後、 華道連盟を創設して会長に就任、二十五年県体育協会会長、全国地方新聞経営者協議会会長、 日本新聞協会理事に推され、 二十三年には、 公選制の県教育委員に立候補して当選、二十四 日本国 年県



国道13号線脇の防護柵を利用して「少年野球発祥の地」を アピールしている神岡町

秋田

のスポー

ツ振興のために献

身した

野球発展のために残した大きな足跡は特筆に

成功のために尽くした多大の功績や、

県内

0

事などの要職に就いてい

る。

中

でも、

昭和三十六年に誘致し

た秋

 \mathbb{H}

国

体

違いない。

人見を象徴する業績として長く記憶されるに

と言われるが、その琴夫人によれば、人見はて落選した折には、慰労に訪れた社員に対して、「おれもいい気になっていたな」と述懐したと伝えられている。

ト秋田 共同 際連合協会秋田県本部長、 本新聞協会常任理事、 通 連盟長、 信社理事、 三十六年日本体育協会常任理 県育英会理 三十五年ボ 二十七年 事長、 1 三十 財 1 ス 寸 力 法 年 ウ

う。 ずい ぶん潔癖症であったらしく、一時期は、どこへ行くにも酒精綿を持ち歩いていたほどだったとい

私の区別をきちんとする人であったのだろう。 しくなり、 また、 人見は、 社員を叱正する時は、 社員が自宅を訪れると、終始にこやかに応対するが、 周囲に他 の社員がいてもいなくても大声で叱り飛ばしたという。 出社すると一変して表情は厳

入院先の県立脳 の社長を退くころから体調はあまりすぐれなかったようだが、ついに昭和五十三年一月十六日 ・血管研究センターで永遠に帰らぬ人となった。八十歳であ つった。

付、 人見は今も本県スポーツ界に多大の貢献をしつづけているのである。 県体協は昭和五十三年<人見スポーツ賞>、同五十四年には<人見スポーツ障害基金>を創設。

人見の没後、

琴夫人は故人の遺志を継いで、

スポーツ振興のためにと秋田県体育協会に一億円を寄

にしたがって、 琴夫人は、 昭和六十二年十月九日に逝去したが、「社会福祉に役立ててほ 遺産一億二千八百万円が秋田市に寄付されたことを付け加えておきたい しい」という夫人の遺言

日中綬章などが授与されていたが、昭和 として顕彰され、東京千鳥ヶ淵公園にある<自由の群像>記念碑にその名が刻された。 人見には、生前から没後にかけて、秋田県文化功労賞、藍綬褒章、勲三等瑞宝章、従四位勲 五十六年十一月、電通主催の第六回マスコミ功労者(新聞人) 三等旭